

「消化器病センター」の立ち上げから1年が経ちました

2019年10月に、秦野赤十字病院の外科、消化器内科が「消化器病センター」として再編成されてから1年が経ちました。外科と内科が一つのチームとして対応することで、最も適切な治療方針を検討し、治療開始を早めるための体制が整いました。

外科と協働することで単純に人数が増え、対応能力が上がった一方で、お互いの力を合わせ時に補い合いながら診療にあたることでできています。結果、外科の手術件数は一昨年の1.6倍に増え、内視鏡と腹腔鏡のコラボレーション手術など、お互いの強みを活かしたより専門的な治療も行っています。

外科の手術件数が
59件増え、2年前の
1.6倍
になりました。

紹介患者さんの
4人に
1人以上
が、消化器病センターです。

「地域の消化器診療の需要に応えるために」

新型コロナウイルス流行後、全体の患者数が減っている中で消化器病センター宛の紹介数は昨年より増加し、全体に占める割合も27%に上昇しました。休日・時間外のご依頼を含めて十分に対応できるように体制を整備する一方で、病院内でのコロナ感染拡大を防ぐために抗原・PCR検査、動線の分離など、防御策を病院全体で推進しております。

今後も地域の消化器診療需要の高まりに応え、満足度の高い診療ができるよう内容の充実に努めて参りますので、気になる症状や何かしらの検査異常などがございましたらぜひご相談ください。他診療科、他職種スタッフとも協力してより良い医療を提供できるように努力を重ねて参ります。

消化器病センター



今月号の
秦野
日赤人+

第二消化器内科部長
みうら ゆうき

三浦 雄輝

- 日本内科学会総合内科指導医
- 日本消化器病学会専門医
- 日本消化器内視鏡学会専門医
- 日本消化管学会胃腸科専門医
- 難病指定医
- 診療情報管理士

第一消化器内科部長
いけだ あきひこ

池田 彰彦

- 日本内科学会総合内科指導医
- 日本消化器病学会専門医
- 日本消化器内視鏡学会専門医
- 日本人間ドック学会
- 人間ドック健診専門医

「新型コロナウイルスの影響」

新型コロナウイルスの影響で内視鏡検査数が1割ほど減る一方、内視鏡治療の件数は増えています。消化管早期がんの内視鏡手術、止血術、消化管閉塞に対するステント治療、胆膵疾患の内視鏡処置など、皆様が必要とする治療内視鏡を適切に行えるよう、幅広い手技に対応しています。

これまでに内視鏡診療を介した感染は世界的にも報告されていませんが、飛沫などに触れることから感染が懸念されています。スコープ等設備の適切な消毒、スタッフの標準予防策・健康管理の徹底など、学会などからの勧告を参照し、地域の感染状況をモニタリングしながら、感染対策を行っています。受検者の皆様には健康管理表、事前問診表の記入などをお願いしています。

内視鏡処置の件数が、
25%
以上
増えました。



▲待合の椅子を離す、リカバリー室をカーテンで仕切る、呼出ベルを導入するなど距離が取れるようにしています。



▲受付や検査説明室、検査室にはビニールカーテンを設置しています。



▲受検者用のアルコール手指消毒薬も準備しております。

「Withコロナ時代の診療へ」

今後は地域の皆さんにとって利便性が高く、専門性が高い内視鏡検査を両立したいと考えています。

前者では、例えば医療機器共有枠を活用した内視鏡予約システム。内視鏡検査目的でご紹介いただいた患者さんの通院負担を減らすための仕組みです。後者では、日本のがんで死亡者数が4番目に多い膵臓がんの早期発見、早期治療のために、ハイリスク患者さんを対象とした超音波内視鏡検査などの精密検査を拡充していきます。

また、アルコール性肝障害、同使用障害の患者さんの治療を、他病院と連携して行う計画を進める予定です。新しい様式でどのような形になるかはわかりませんが、コロナに負けず、地域の皆様との連携をさらに深めて参ります。



▲スタッフ一同笑顔でお迎えます。



▲外科と内科合同カンファレンスの様子。

▲外科と内科の「コラボレーション手術」（腹腔鏡・内視鏡合同手術）や術中内視鏡など、協働して治療を行っています。